

鹿児島県の高齢透析患者介護関連実態調査報告

—2019年3月現在—

上山達典*1,5 萩原隆二*2,5 四枝皓二*3,5 速見浩士*4,5

*1 上山病院 *2 高田病院 *3 四枝内科 *4 鹿児島大学病院血液浄化療法部 *5 鹿児島県透析医会

key words : 透析, 介護保険, 高齢化, 地域包括ケアシステム

要旨

透析患者の急速な高齢化による要介護認定率や介護サービスの利用状況などについて、「福岡県における高齢透析患者の介護実態調査報告」に倣い、鹿児島県透析医会会員が所属する全56施設の65歳以上の透析患者を対象として、2019年3月31日現在で、2回目の調査を行った。

35施設(62.5%, 前回29施設)から回答を得た。

高齢透析患者1,690名の平均年齢は75.7歳であった。「糖尿病性腎症」による透析導入がもっとも高率で、33.8%であった。対象高齢透析患者のうち520名が要介護認定を受けており、要介護認定率は30.8%で、そのうち男性は278名で認定率26.6%、女性は242名で認定率37.5%であった。要介護認定者の平均年齢は80.0歳、うち男性は79.1歳、女性は81.0歳であった。前回と比較して、要介護認定者の平均年齢が若干上昇していた。

高齢透析患者に軽度者が多いのは、他の高齢者と比べて要介護認定率が高く、また死亡率も高い傾向にあることから、比較的全身状態の良い軽度者の方が残る形で多くなっていると考えられる。高齢患者の増加、家族構成の変化、必要な支援の内容など、「地域包括ケアシステム」が透析をしていない高齢者のみならず、高齢透析患者にも必要であることが推察された。

はじめに

日本国民の高齢化は急速に進み、令和7年には団塊

の世代が後期高齢者となる2025年問題が控えており、透析患者を取り巻く環境も刻々と変化している。慢性透析患者の人数は鈍化しているものの増加しており、日本透析医学会発刊の「わが国の慢性透析療法の現況」によれば、2017年末には334,505人に達している。

脳梗塞などの合併症を持つ患者が増えてきており、ADLの低下をきたした高齢患者も増加していることから、医療者側の負担ならびに患者側の負担も変わりなく存在する。また、透析患者のみならず、高齢者の生活環境は、インフォーマルな支援を受けづらい状況から、継続的に発展させる必要のある「地域包括ケアシステム」の重要性を裏付けるものとなっており、高齢透析患者にとっては、通院等にかかる様々な労力の担い手確保も必要となってくると考えられる。

今回は、透析患者の急速な高齢化による要介護認定率や介護サービスの利用状況など、「福岡県における高齢透析患者の介護実態調査報告」に倣い、また、2016年3月31日末時点で行った調査に引き続いて、鹿児島県透析医会会員施設にかかっている高齢透析患者の実態を調査した。この調査から、高齢透析患者の介護等の実態を把握し、より良い透析医療を運営するための参考としたい。

1 対象および方法

1-1 調査対象

鹿児島県透析医会会員医療機関56施設のうち、35施設から回答を得た(表1)。また、鹿児島県透析医会会員医療機関における2019年3月31日現在で満65

表1 調査参加施設一覧（鹿児島県透析医会会員施設）

医療機関名		住 所	地 域
1	医療法人透仁会 よしだ泌尿器科クリニック	出水市	北薩
2	医療法人優翔会 いまむらクリニック	阿久根市	北薩
3	特定医療法人昴和会 内山病院	阿久根市	北薩
4	医療法人 森田内科医院	薩摩川内市	北薩
5	医療法人和翔会 小緑内科	薩摩郡さつま町	北薩
6	医療法人聖仁会 南薩ケアほすびたる	南九州市	南薩
7	鹿児島県立薩南病院	南さつま市	南薩
8	医療法人 宮内クリニック	南さつま市	南薩
9	医療法人愛徳会 上村内科クリニック	指宿市	南薩
10	社会医療法人聖医会 サザン・リージョン病院	枕崎市	南薩
11	医療法人仁明会 さくらやまクリニック	志布志市	大隅
12	医療法人 SAKURA 志布志中央クリニック	志布志市	大隅
13	医療法人参篤会 高原病院	曾於市	大隅
14	医療法人青仁会 池田病院	鹿屋市	大隅
15	医療法人朋愛会 おばま医院	鹿屋市	大隅
16	肝属郡医師会 肝属郡医師会立病院	肝属郡錦江町	大隅
17	医療法人柏葉会 水間病院	伊佐市	始良・伊佐
18	医療法人健秀会 たまいクリニック	霧島市	始良・伊佐
19	医療法人水田会 加治木中央クリニック	始良市	始良・伊佐
20	医療法人真和会 川原腎・泌尿器科クリニック	始良市	始良・伊佐
21	医療法人厚成会 水間内科医院	奄美市	大島
22	医療法人實信会 まきのせ泌尿器科	いちき串木野市	鹿児島
23	医療法人神護庵 じんごあん整形外科内科クリニック	日置市	鹿児島
24	医療法人愛樹会 外山内科クリニック	鹿児島市	鹿児島
25	医療法人裕聖会 うるた内科	鹿児島市	鹿児島
26	公益財団法人慈愛会 今村総合病院	鹿児島市	鹿児島
27	医療法人秀緑会 大塚クリニック	鹿児島市	鹿児島
28	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科先進治療科学専攻腫瘍学講座泌尿器科学分野	鹿児島市	鹿児島
29	医療法人仁胤会 前田内科クリニック	鹿児島市	鹿児島
30	鹿児島医療生活協同組合 鹿児島生協病院 谷山生協クリニック	鹿児島市	鹿児島
31	医療法人静風会 八木クリニック	鹿児島市	鹿児島
32	医療法人光樹会 四枝内科	鹿児島市	鹿児島
33	医療法人玉昌会 高田病院	鹿児島市	鹿児島
34	医療法人腎愛会 上山病院 うえやま腎クリニック	鹿児島市	鹿児島
35	医療法人社団 森山内科・脳神経外科	宮崎県都城市	宮崎

表2 年齢別対象者数

年 齢	性 別			うちHDF 実施中	うち腹膜透析 (HD併用含む)
	男性	女性	合計		
65～70 未満	294	137	431 (25.5%)	138	7
70～75 未満	272	153	425 (25.1%)	124	14
75～80 未満	207	99	306 (18.1%)	98	6
80～85 未満	145	125	270 (16.0%)	64	9
85～90 未満	95	93	188 (11.1%)	42	7
90 以上	32	38	70 (4.1%)	15	6
合 計	1,045	645	1,690 (100.0%)	481	49

歳以上、かつ透析導入済みの腹膜透析を含む透析患者を対象とした。

調査対象となった65歳以上の高齢透析患者で、回

収された記入用紙の対象者総数は1,690名であった。

対象者の約2.9%にあたる49名の腹膜透析患者を含む。65歳以上70歳未満の割合が25.5%（431名）、70

歳以上 75 歳未満が 25.1% (425 名), 75 歳以上 80 歳未満が 18.1% (306 名), 80 歳以上 85 歳未満が 16.0% (270 名), 85 歳以上 90 歳未満が 11.1% (188 名), 90 歳以上が 4.1% (70 名), 最高齢が 99 歳であった (表 2)。年齢別対象者数は, 前回も各階層同水準の割合であった。

1-2 調査方法

メールまたは FAX により回答を回収した。

調査項目は, 性別, 年齢, 透析歴, 透析導入原因疾患, 日常生活に支障のある合併症, 入院の有無, 居住・生活環境, 主な通院方法, 要介護認定申請の有無, 要介護度, 利用サービス, 透析加療方法に関して, 択一, 項目によっては複数回答してもらう形で行った。入院中の患者については, 居住・生活環境, 主な通院方法等については調査項目としなかった。各医療施設では対象となる患者を特定できるが, 他医療施設には個人情報や施設情報が伝わらないように集計した。

2 結果

2-1 透析導入原因疾患と日常生活に支障となる合併症

「透析導入原因疾患」は, 糖尿病性腎症が最も多く, 全体で 33.8% (前回 39.5%), 男女別でも男性 38.0% (前回 43.7%), 女性 27.1% (前回 33.8%) と, ともに最も多かった (表 3-1)。また, 要介護認定者 520 名

のうち, 193 名, 37.1% (前回 43.8%) が糖尿病性腎症から透析導入となっていた (表 3-2)。

慢性糸球体腎炎を見ると, 全体の 24.0% (前回 28.7%) で透析導入原因となっているが, 男女で特徴があり, 男性の場合は, 糖尿病性腎症 38.0%, 慢性糸球体腎炎 22.6% と, 糖尿病性腎症が明らかに多いが, 女性は, 糖尿病性腎症 27.1% と, 慢性糸球体腎炎 26.4% の差が少なかった (表 3-1)。要介護認定者 520 名のうち 100 名, 19.2% (前回 21.2%) が, 慢性糸球体腎炎から透析導入となっていた (表 3-2)。

透析導入原因疾患ごとの平均透析歴にも差があり, 慢性糸球体腎炎による患者の平均透析歴は 11 年 8 カ月と全体の平均透析歴 7 年 9 カ月より長く, 糖尿病性腎症では 5 年 10 カ月, 腎硬化症では 4 年 10 カ月と他の疾患と比しても著しく短かった (前回調査では, 糖尿病性腎症が 6 年 11 カ月, 腎硬化症は 7 年 1 カ月であった)。

「日常生活に支障となる合併症」では, 歩行障害のある人が 341 名 (20.2%) と最も多く, 認知症, 視力障害と続いた (表 4-1)。透析導入疾患別でみると, どの合併症も「糖尿病性腎症」による透析導入の人の割合が高かった (前回調査でも同様)。要介護認定率はいずれの合併症でも高率で, 「下肢切断」の人の要介護認定率が 44.0% と最も低かった (表 4-2)。

表 3-1 透析導入原因疾患 (性別)

	男性			女性			合計		
	人数	割合	平均透析歴	人数	割合	平均透析歴	人数	割合	平均透析歴
糖尿病性腎症	397	38.0%	5 年 9 カ月	175	27.1%	6 年	572	33.8%	5 年 10 カ月
慢性糸球体腎炎	236	22.6%	11 年 4 カ月	170	26.4%	12 年 2 カ月	406	24.0%	11 年 8 カ月
腎硬化症	114	10.9%	4 年 9 カ月	72	11.2%	5 年	186	11.0%	4 年 10 カ月
その他	298	28.5%	6 年 11 カ月	228	35.3%	9 年 1 カ月	526	31.1%	7 年 10 カ月
合計	1,045	100%		645	100%		1,690	100%	

表 3-2 透析導入原因疾患と介護保険認定

	男性		女性		合計		
	認定者数	割合 ^{†1}	認定者数	割合 ^{†1}	認定者数	割合① ^{†1}	割合② ^{†2}
糖尿病性腎症	117	29.5%	76	43.4%	193	33.7%	37.1%
慢性糸球体腎炎	44	18.6%	56	32.9%	100	24.6%	19.2%
腎硬化症	29	25.4%	28	38.9%	57	30.6%	11.0%
その他	88	29.5%	82	36.0%	170	32.3%	32.7%
合計	278		242		520		

†1 表 3-1 の男性・女性・合計の夫々の人数に対する比率

†2 認定者数 (合計, n=520) に対する比率

表 4-1 日常生活に支障となる合併症（透析導入疾患別）

	糖尿病性 腎症	慢性糸球体 腎炎	腎硬化症	その他	合 計
男性					
視力障害	52 (67.5%) ^{†1}	9 (11.7%)	6 (7.8%)	10 (13.0%)	77 (7.4%) ^{†2}
四肢麻痺	17 (42.5%)	9 (22.5%)	2 (5.0%)	12 (30.0%)	40 (3.8%)
歩行障害	74 (41.6%)	40 (22.5%)	20 (11.2%)	44 (24.7%)	178 (17.0%)
下肢切断	14 (73.7%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	4 (21.1%)	19 (2.5%)
認知症	36 (34.0%)	27 (25.5%)	11 (10.4%)	32 (30.2%)	106 (10.1%)
女性					
視力障害	35 (50.7%)	14 (20.3%)	7 (10.1%)	13 (18.8%)	69 (10.7%)
四肢麻痺	3 (20.0%)	6 (40.0%)	3 (20.0%)	3 (20.0%)	15 (2.3%)
歩行障害	49 (30.1%)	46 (28.2%)	20 (12.3%)	48 (29.4%)	163 (25.3%)
下肢切断	5 (83.3%)	1 (16.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	6 (0.9%)
認知症	37 (31.1%)	27 (22.7%)	16 (13.4%)	39 (32.8%)	119 (18.4%)
合計					
視力障害	87 (59.6%)	23 (15.8%)	13 (8.9%)	23 (15.8%)	146 (8.6%)
四肢麻痺	20 (36.4%)	15 (27.3%)	5 (9.1%)	15 (27.3%)	55 (3.3%)
歩行障害	123 (36.1%)	86 (25.2%)	40 (11.7%)	92 (27.0%)	341 (20.2%)
下肢切断	19 (76.0%)	2 (8.0%)	0 (0.0%)	4 (16.0%)	25 (1.5%)
認知症	73 (32.4%)	54 (24.0%)	27 (12.0%)	71 (31.6%)	225 (13.3%)

†1 男性・女性・合計の合併症患者数に対する比率

†2 表 2 に示された今回の調査対象者数（男性・女性・合計）夫々に対する比率

表 4-2 合併症と介護認定

	視力障害	四肢麻痺	歩行障害	下肢切断	認知症
患者数	146	55	341	25	225
うち介護認定者数	78	32	201	11	179
介護認定比率	(53.4%)	(58.2%)	(58.9%)	(44.0%)	(79.6%)

2-2 要介護認定率

(1) 年齢階層別の認定率および要介護度

当調査における 65 歳以上の要介護認定率は 30.8%（前回 30.6%）、前期高齢者は 16.8%（前回 16.3%）、後期高齢者は 45.1%（前回 44.5%）であった（表 5-1）。65 歳以上の階級別認定率では、高齢になるほど、認定率が高くなるという結果であった（表 5-2、前回も同傾向）。

高齢透析患者の要介護度は、要支援 1：6.7%（前回 6.3%）、要支援 2：19.4%（前回 24.9%）、要介護 1：18.1%（前回 18.9%）、要介護 2：20.0%（前回 20.9%）、

要介護 3：15.8%（前回 11.6%）、要介護 4：11.5%（前回 10.1%）、要介護 5：8.5%（前回 7.1%）であった（表 5-1, 5-2）。全国や鹿児島県、鹿児島市における一般人口の調査では、要介護 1 の人の比率が高く、他の介護度は比較的均等に分散していたが（表 6）、高齢透析患者の場合、要支援 1 が少なく、要支援 2～要介護 2 までの人が多くなり、要介護 3 以上の重度者は、全国や自治体統計と相似した比率であった。

全国および鹿児島県の 65 歳以上の一般人口と当調査高齢透析患者とを比較するグラフ（図 1）を示すと、「要支援 1」と「要支援 2」で大きな違いが見られた。

表 5-1 要介護認定率および介護度（前・後期高齢者別）

	人数 (人)	認定者数 (人)	介護度						
			要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
前期高齢者	856	144 (16.8%) †1	13 (9.0%) †2	26 (18.1%)	27 (18.8%)	30 (20.8%)	20 (13.9%)	14 (9.7%)	14 (9.7%)
後期高齢者	834	376 (45.1%)	22 (5.9%)	75 (19.9%)	67 (17.8%)	74 (19.7%)	62 (16.5%)	46 (12.2%)	30 (8.0%)
合計	1,690	520 (30.8%)	35 (6.7%)	101 (19.4%)	94 (18.1%)	104 (20.0%)	82 (15.8%)	60 (11.5%)	44 (8.5%)

†1 人数に対する比率

†2 認定者数に対する比率

表 5-2 要介護認定率および介護度（年齢別）

	人数 (人)	認定者数 (人)	介護度						
			要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
65～70 未満	431	58 (13.5%) †1	2 (3.4%) †2	12 (20.7%)	16 (27.6%)	12 (20.7%)	8 (13.8%)	5 (8.6%)	3 (5.2%)
70～75 未満	425	86 (20.2%)	11 (12.8%)	14 (16.3%)	11 (12.8%)	18 (20.9%)	12 (14.0%)	9 (10.5%)	11 (12.8%)
75～80 未満	306	90 (29.4%)	6 (6.7%)	19 (21.1%)	16 (17.8%)	12 (13.3%)	15 (16.7%)	16 (17.8%)	6 (6.7%)
80～85 未満	270	121 (44.8%)	5 (4.1%)	29 (24.0%)	20 (16.5%)	27 (22.3%)	15 (12.4%)	12 (9.9%)	13 (10.7%)
85～90 未満	188	117 (62.2%)	6 (5.1%)	20 (17.1%)	22 (18.8%)	26 (22.2%)	20 (17.1%)	14 (12.0%)	9 (7.7%)
90～95 未満	57	37 (64.9%)	3 (8.1%)	5 (13.5%)	6 (16.2%)	8 (21.6%)	11 (29.7%)	2 (5.4%)	2 (5.4%)
95～	13	11 (84.6%)	2 (18.2%)	2 (18.2%)	3 (27.3%)	1 (9.1%)	1 (9.1%)	2 (18.2%)	0 (0.0%)

†1 人数に対する比率

†2 認定者数に対する比率

表 6 要介護認定率および介護度（全国・鹿児島県・鹿児島市）

	人数 (人)	認定者数 (人)	介護度						
			要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
65 歳以上									
全国	35,251,985	6,452,585 (18.3%) †1	915,333 (14.2%) †2	905,167 (14.0%)	1,301,634 (20.2%)	1,110,028 (17.2%)	848,949 (13.2%)	786,410 (12.2%)	585,064 (9.1%)
鹿児島県	507,750	100,383 (19.8%)	13,317 (13.3%)	13,162 (13.1%)	21,200 (21.1%)	15,036 (15.0%)	12,925 (12.9%)	13,981 (13.9%)	10,762 (10.7%)
鹿児島市	159,886	33,143 (20.7%)	5,583 (16.8%)	5,201 (15.7%)	7,316 (22.1%)	4,129 (12.5%)	3,921 (11.8%)	3,646 (11.0%)	3,347 (10.1%)
前期高齢者									
全国	17,296,316	730,369 (4.2%)	116,295 (15.9%)	118,667 (16.2%)	137,385 (18.8%)	129,186 (17.7%)	87,483 (12.0%)	75,664 (10.4%)	65,689 (9.0%)
鹿児島県	238,311	9,190 (3.9%)	1,424 (15.5%)	1,448 (15.8%)	1,877 (20.4%)	1,381 (15.0%)	1,120 (12.2%)	1,029 (11.2%)	911 (9.9%)
鹿児島市	80,840	3,688 (4.6%)	663 (18.0%)	648 (17.6%)	817 (22.2%)	449 (12.2%)	428 (11.6%)	360 (9.8%)	323 (8.8%)
後期高齢者									
全国	17,955,669	5,722,216 (31.9%)	799,038 (14.0%)	786,500 (13.7%)	1,164,249 (20.3%)	980,842 (17.1%)	761,466 (13.3%)	710,746 (12.4%)	519,375 (9.1%)
鹿児島県	269,439	91,193 (33.8%)	11,893 (13.0%)	11,714 (12.8%)	19,323 (21.2%)	13,655 (15.0%)	11,805 (12.9%)	12,952 (14.2%)	9,851 (10.8%)
鹿児島市	79,046	29,455 (37.3%)	4,920 (16.7%)	4,553 (15.5%)	6,499 (22.1%)	3,680 (12.5%)	3,493 (11.9%)	3,286 (11.2%)	3,024 (10.3%)

〔人数〕、認定者数は H31.3 末時点（暫定）

†1 人数に対する比率

†2 認定者数に対する比率

（参考 URL ㉑1 より）

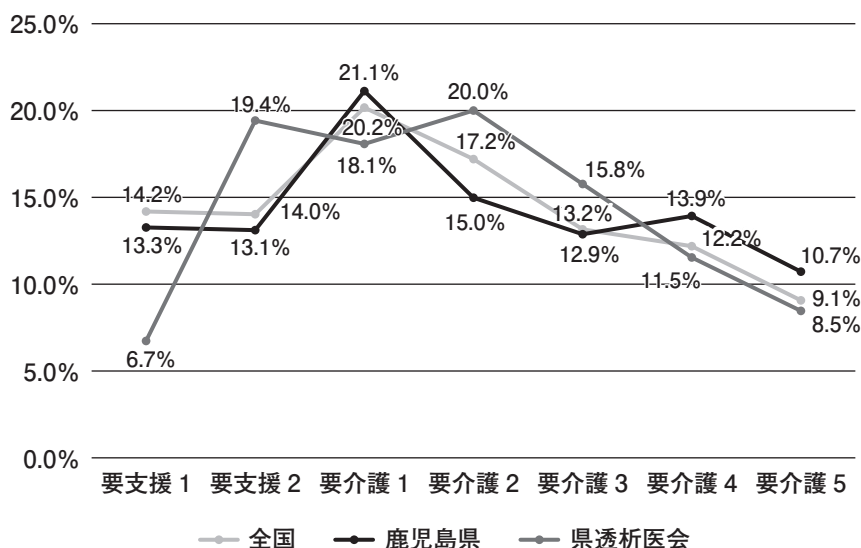


図1 要介護認定率の比較 (全国・鹿児島県・今回調査)

(2) 透析歴別要介護認定率

透析歴別要介護認定率では、「65歳以上」(表7)と「75歳以上」(表8)で集計した。

表7の「65歳以上」において、要介護認定率が最も高かったのは、透析歴が2～5年未満の人で、34.5

%であった(前回は「2年未満」で34.9%)。患者数は5～10年未満の人々が最も多く431名であり、そのうち要介護認定者は125名で要介護認定率は29.0%であった。透析歴が15年以上となると人数は急に減り、全体の15.0%、253名であった(前回19.8%)。その

表7 透析歴別要介護認定率 (65歳以上)

	患者数			要介護認定		平均透析歴	平均年齢
	男性	女性	合計	認定数	認定率 [†]		
全体	1,045	645	1,690	520	30.8%	7年9カ月	75.7
2年未満	266	121	387	128	33.1%	10カ月	77.2
2～5年未満	259	156	415	143	34.5%	3年4カ月	76.5
5～10年未満	263	168	431	125	29.0%	7年1カ月	76.1
10～15年未満	121	83	204	63	30.9%	12年1カ月	74.6
15～20年未満	65	43	108	24	22.2%	17年3ヶ月	72.8
20～25年未満	25	36	61	13	21.3%	22年5カ月	73.0
25～30年未満	20	17	37	14	37.8%	27年4カ月	71.3
30年以上	26	21	47	10	21.3%	35年4カ月	69.5

† 患者数(合計)に対する比率

表8 透析歴別要介護認定率 (75歳以上)

	患者数			要介護認定		平均透析歴	平均年齢
	男性	女性	合計	認定数	認定率 [†]		
患者数	479	355	834	376	45.1%	6年1カ月	82.0
2年未満	153	75	228	105	46.1%	10カ月	82.1
2～5年未満	130	100	230	106	46.1%	3年3カ月	82.1
5～10年未満	116	98	214	91	42.5%	7年2カ月	82.8
10～15年未満	47	44	91	42	46.2%	11年11カ月	81.7
15～20年未満	19	19	38	15	39.5%	16年11カ月	79.9
20～25年未満	6	13	19	10	52.6%	22年1カ月	80.9
25～30年未満	7	2	9	5	55.6%	27年3カ月	78.7
30年以上	1	4	5	2	40.0%	34年11カ月	75.4

† 患者数(合計)に対する比率

253名の要介護認定率は24.1%（前回24.6%）であり、透析歴15年未満全体1,437名の要介護認定率31.9%（前回32.1%）よりむしろ低かった。

表8の「75歳以上」では、透析歴は2～5年未満の患者が最も多く、834名中230名で、そのうち106名が要介護認定者で、認定率は46.1%（前回42.4%）であった。透析歴10年以上となると人数が急に減り、75歳以上835名中162名が透析歴10年以上であった。そのうち74名が要介護認定者で、認定率は45.7%であった。透析歴2年未満～20年未満で要介護認定率が最も高かった透析歴群は2年未満と2～5年未満で46.1%であった。

(3) 世帯別要介護認定率と要介護度

対象高齢透析患者の居住状況を調査したところ、1,382名、81.8%（前回83.3%）が自宅で生活していた（表9）。世帯別要介護認定率をみると、独居世帯が30.4%（前回31.6%）、若年者と同居の世帯が23.8%（前回30.1%）、高齢者のみの世帯の要介護認定率は19.8%（前回20.7%）であった。特養・老健入所者の要介護認定率は100%であった。

世帯別介護度では（表10）、要介護5の44名の

うち11名、25%（前は要介護5の28名のうち14名、50%）の患者が自宅で生活している。

2-3 通院状況

(1) 要介護度別通院状況

対象高齢透析患者の通院状況は、712名、42.1%（前回39%）が施設送迎を利用していた（表11）。独力通院が551名、32.6%（前回31.6%）、介護タクシーでの通院が24名、1.4%（前回2.5%）、家族による送迎での通院が187名、11.1%（前回11.7%）であった。

要介護認定者で独力通院をしているのは27名と、要介護認定者520名の5.2%（前回6.3%）にとどまり、施設送迎を利用する要介護認定者は293名と56.3%を占めた（前回49.9%）（表11）。介護タクシーの利用については24名の内23名が「要介護1」以上であり、その23名については、介護保険サービスにおける利用が「要介護1」以上に限られる「福祉有償運送」での通院であると考えられた。他の1名は、自費利用の介護タクシーか、障害サービスの「福祉有償運送」利用が考えられた。

表9 世帯別要介護認定率

	合計	男性	女性	平均年齢	平均透析歴	介護保険		介護サービス	
						認定者数	認定率 ^{†1}	利用者数	利用率 ^{†2}
全体	1,690	1,045	645	75.7	7年9カ月	520	30.8%	330	63.5%
入院	191	105	86	78.9	7年2カ月	88	46.1%	—	—
独居世帯	309	172	137	74.8	7年11カ月	94	30.4%	66	70.2%
高齢者のみの世帯	673	479	194	74.5	8年1カ月	133	19.8%	92	69.2%
65歳未満と同居	400	229	171	75.0	7年10カ月	95	23.8%	67	70.5%
特養・老健	25	12	13	81.0	6年	25	100.0%	25	100.0%
その他施設	92	48	44	81.4	5年11カ月	83	90.2%	80	96.4%

†1 表の左の合計に対する比率

†2 介護保険認定者数に対する比率

表10 世帯別介護度

	要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
合計	35 (6.7%) ^{†1}	101 (19.4%)	94 (18.1%)	104 (20.0%)	82 (15.8%)	60 (11.5%)	44 (8.5%)
入院	2 (5.7%) ^{†2}	7 (6.9%)	12 (12.8%)	13 (12.5%)	23 (28.1%)	14 (23.3%)	17 (38.6%)
独居世帯	12 (34.3%)	35 (34.7%)	23 (24.5%)	17 (16.3%)	3 (3.7%)	3 (5.0%)	1 (2.3%)
高齢者のみの世帯	15 (42.9%)	25 (24.8%)	30 (31.9%)	32 (30.8%)	14 (17.1%)	9 (15.0%)	8 (18.2%)
65歳未満と同居	3 (8.6%)	24 (23.8%)	13 (13.8%)	25 (24.0%)	19 (23.2%)	9 (15.0%)	2 (4.5%)
特養・老健	2 (5.7%)	3 (3.0%)	2 (2.1%)	2 (1.9%)	2 (2.4%)	10 (16.7%)	4 (9.1%)
その他施設	1 (2.9%)	7 (6.9%)	12 (12.8%)	15 (14.4%)	21 (25.6%)	15 (25.0%)	12 (27.3%)

†1 表9の介護保険認定者数520人に対する比率

†2 要支援1から要介護5までの夫々の合計人数に対する比率

表 11 要介護度別通院状況

	人数	通院方法					平均年齢	平均透析歴	入院中
		独力通院	隣接施設から介助	家族送迎	施設送迎	介護タクシー			
合計	1,690	551 (32.6%)	25 (1.5%)	187 (11.1%)	712 (42.1%)	24 (1.4%)	75.7	7年9カ月	191 (11.3%)
未認定	1,170	524 (44.8%)	1 (0.1%)	122 (10.4%)	419 (35.8%)	1 (0.1%)	73.8	8年1カ月	103 (8.8%)
要支援1	35	8 (22.9%)	0 (0.0%)	5 (14.3%)	19 (54.3%)	1 (2.9%)	80.0	6年10カ月	2 (5.7%)
要支援2	101	13 (12.9%)	3 (3.0%)	8 (7.9%)	70 (69.3%)	0 (0.0%)	79.5	7年4カ月	7 (6.9%)
要介護1	94	2 (2.1%)	1 (1.1%)	15 (16.0%)	56 (59.6%)	8 (8.5%)	79.7	7年	12 (12.8%)
要介護2	104	4 (3.8%)	7 (6.7%)	14 (13.5%)	61 (58.7%)	5 (4.8%)	80.2	7年3カ月	13 (12.5%)
要介護3	82	0 (0.0%)	6 (7.3%)	13 (15.9%)	38 (46.3%)	2 (2.4%)	80.8	7年9カ月	23 (28.1%)
要介護4	60	0 (0.0%)	5 (8.3%)	6 (10.0%)	31 (51.7%)	4 (6.7%)	79.9	5年5カ月	14 (23.3%)
要介護5	44	0 (0.0%)	2 (4.5%)	4 (9.1%)	18 (40.9%)	3 (6.8%)	79.4	6年4カ月	17 (38.6%)

() 内の数値は表の左側にある人数に対する比率

表 12 年齢別通院状況

	人数	通院方法					平均年齢	平均透析歴	入院中
		独力通院	隣接施設から介助	家族送迎	施設送迎	介護タクシー			
65～70 未満	431	228 (52.9%)	1 (0.2%)	41 (9.5%)	138 (32.0%)	1 (0.2%)	67.2	10年1カ月	22 (5.1%)
70～75 未満	425	179 (42.1%)	3 (0.7%)	58 (13.6%)	138 (32.5%)	4 (0.9%)	71.7	8年9カ月	43 (10.1%)
75～80 未満	306	95 (31.1%)	3 (1.0%)	39 (12.7%)	128 (41.8%)	5 (1.6%)	76.9	7年2カ月	36 (11.8%)
80～85 未満	270	41 (15.2%)	3 (1.1%)	26 (9.6%)	155 (57.4%)	5 (1.9%)	81.9	5年5カ月	40 (14.8%)
85～90 未満	188	7 (3.7%)	10 (5.3%)	16 (8.5%)	111 (59.0%)	7 (3.7%)	86.8	5年9カ月	37 (19.7%)
90 以上	70	1 (1.4%)	5 (7.1%)	7 (10.0%)	42 (60.0%)	2 (2.9%)	92.3	4年4カ月	13 (18.6%)

() 内の数値は表の左の人数に対する比率

(2) 年齢別通院状況

独力通院は、65～70歳未満では431名のうち228名52.9%（前回56%）であった（表12）。70～75歳未満、75～80歳未満と、高齢になるにつれて独力通院は減少する傾向にあった（前回調査でも同様）。

家族送迎は、70～75歳未満は58名で人数が最多であったが、各階層の割合に大差はなかった。施設送迎は、65～70歳未満が32.0%（前回29.0%）と最も利用率が低く、75歳以上の後期高齢者になると、利用率が高くなる傾向にあった（前回調査でも同様）。

(3) 透析歴別通院状況

独力通院している人の比率は透析歴15～20年未満の患者が多く、43.5%（前回42.7%）であった（表13）。透析歴30年以上の患者も多く42.6%（前回46.7%）であった。家族送迎は透析歴別で大差はなかった。施設送迎でも各階層での利用率に大差はなかった。

2-4 性別による比較

今回の調査では、要介護認定者数は男女差が少なかったが患者数で男性が多いため、要介護認定率は男性26.6%（前回23.3%）、女性37.5%（前回40.7%）と

表 13 透析歴別通院状況

	人数	通院方法					平均年齢	平均透析歴	入院中
		独力通院	隣接施設から介助	家族送迎	施設送迎	介護タクシー			
2年未満	387	110 (28.4%)	8 (2.1%)	44 (11.4%)	165 (42.6%)	8 (2.1%)	77.2	10カ月	52 (13.4%)
2～5年未満	415	133 (32.1%)	7 (1.7%)	48 (11.6%)	185 (44.6%)	8 (1.9%)	76.5	3年4カ月	34 (8.2%)
5～10年未満	431	137 (31.8%)	8 (1.9%)	38 (8.8%)	184 (42.7%)	5 (1.2%)	76.0	7年1カ月	59 (13.7%)
10～15年未満	204	69 (33.8%)	1 (0.5%)	22 (10.8%)	87 (42.6%)	2 (1.0%)	74.6	12年1カ月	23 (11.3%)
15～20年未満	108	47 (43.5%)	0 (0.0%)	13 (12.0%)	40 (37.0%)	1 (0.9%)	72.8	17年3ヶ月	7 (6.5%)
20～25年未満	61	23 (37.7%)	1 (1.6%)	9 (14.8%)	19 (31.1%)	0 (0.0%)	73.0	22年5カ月	9 (14.8%)
25～30年未満	37	12 (32.4%)	0 (0.0%)	4 (10.8%)	18 (48.6%)	0 (0.0%)	71.3	27年4カ月	3 (8.1%)
30年以上	47	20 (42.6%)	0 (0.0%)	9 (19.1%)	14 (29.8%)	0 (0.0%)	69.5	35年4カ月	4 (8.5%)

() 内の数値は表の左の人数に対する比率

表 14 性別による比較 (人数・年齢・要介護度)

	人数	平均年齢	介護保険認定			要介護度別						
			認定者数	認定率 ^{†1}	平均年齢	要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5
全体	1,690	75.7	520	30.8%	80.0	35 (6.7%) ^{†2}	101 (19.4%)	94 (18.1%)	104 (20.0%)	82 (15.8%)	60 (11.5%)	44 (8.5%)
男性	1,045	74.9	278	26.6%	79.1	21 (7.6%)	57 (20.5%)	53 (19.1%)	57 (20.5%)	40 (14.4%)	28 (10.1%)	22 (7.9%)
女性	645	76.9	242	37.5%	81.0	14 (5.8%)	44 (18.2%)	41 (16.9%)	47 (19.4%)	42 (17.4%)	32 (13.2%)	22 (9.1%)

†1 表の左の人数に対する比率

†2 () 内の数値は認定者数に対する比率

表 15 性別による比較 (腹膜透析・透析歴・居住環境・通院方法)

	人数	腹膜透析人数	平均透析歴	介護サービス利用者数	居住環境			通院方法			
					入院中	施設(特・老・他)	独居世帯	独力通院	家族送迎	施設(機関)送迎	介護タクシー
全体	1,690	49	7年9カ月	330 (19.5%)	191 (11.3%)	117 (6.9%)	309 (18.3%)	551 (32.6%)	187 (11.1%)	712 (42.1%)	24 (1.4%)
男性	1,045	32	7年3カ月	176 (16.8%)	105 (10.1%)	60 (5.7%)	172 (16.5%)	429 (41.1%)	100 (9.6%)	394 (37.7%)	7 (0.7%)
女性	645	17	8年7カ月	154 (23.9%)	86 (13.3%)	57 (8.8%)	137 (21.2%)	122 (18.9%)	87 (13.5%)	318 (49.3%)	17 (2.6%)

() 内の数値は表の左の人数に対する比率

差があった(表14)。要介護度別で目立った男女差はなく、各介護度の割合も相似していた。前回調査では要介護4で、女性が男性の3倍近い人数であった。

平均透析歴は、男性より女性のほうが1年4カ月ほど長かった(表15)。居住環境では、目立った男女差はなかった。通院方法においては、女性は男性に比べて独力通院が少なく、介護タクシーの利用が多かった

(前回調査では、女性は長期入院や施設入居者が多い傾向にあり、通院方法では独力通院の77.6%が男性だった)。

2-5 高齢透析患者の介護サービス利用状況

(1) 「全対象患者」介護サービス利用状況

対象高齢透析患者のうち、520名、30.8% (前回

表 16 高齢透析患者の介護サービス利用状況

	要介護認定者	認定者だが利用なし	利用介護サービス		
			訪問サービス	通所サービス	その他
全対象患者	520	190 (36.5%)	104 (20.0%)	116 (22.3%)	190 (36.5%)
性別					
男性	278	102	56 (20.1%)	65 (23.4%)	96 (34.5%)
女性	242	88	48 (19.8%)	51 (21.1%)	94 (38.8%)
介護度別					
要支援 1 と 2	136	65	20 (14.7%)	27 (19.9%)	30 (22.1%)
要介護 1 と 2	198	58	46 (23.2%)	57 (28.8%)	71 (35.9%)
要介護 3～5	186	67	39 (21.0%)	32 (17.2%)	89 (47.8%)
世帯類別					
独居	94	28	29 (30.9%)	28 (29.8%)	23 (24.5%)
高齢者世帯	133	41	26 (19.5%)	47 (35.3%)	39 (29.3%)
若年者と同居	97	30	26 (26.8%)	26 (26.8%)	28 (28.9%)
特養・老健	25	0	0 (0.0%)	0 (0.0%)	25 (100.0%)
その他施設	83	3	24 (28.9%)	15 (18.1%)	75 (90.4%)
年齢別					
前期高齢者	144	47	33 (22.9%)	32 (22.2%)	51 (35.4%)
後期高齢者	376	143	72 (19.1%)	84 (22.3%)	139 (37.0%)
85 歳以上	165	54	31 (18.8%)	40 (24.2%)	69 (41.8%)
透析歴別					
5 年未満	271	102	49 (18.1%)	58 (21.4%)	95 (35.1%)
5～10 年未満	125	44	23 (18.4%)	28 (22.4%)	51 (40.8%)
10～15 年未満	63	21	14 (22.2%)	17 (27.0%)	24 (38.1%)
15～20 年未満	24	7	6 (25.0%)	7 (29.2%)	11 (45.8%)
20 年以上	37	16	13 (35.1%)	6 (16.2%)	9 (24.3%)

() 内は表の左に示された要介護認定者数に対する比率

30.6%) が要介護認定を受けていた。このうち 190 名、36.5% (前回 35.0%) が介護サービスを利用していなかった (表 16)。

各項目での利用率は、訪問サービス (訪問介護、訪問看護、居宅療養管理指導、訪問リハビリテーション) で 20.0% (前回 23.4%)、通所サービス (通所介護、通所リハビリテーション) で 22.3% (前回 30.5%)、その他 (ショートステイ、福祉用具貸与、入居施設でのサービス等) 36.5% (前回 35.0%) であった。

(2) 性別介護サービス利用状況

各サービス項目において、目立った男女差はなかった (表 17)。全体のサービス利用率は男性 63.3% (前回 64.6%)、女性 63.6% (前回 65.3%) であった。

(3) 介護度別

要支援、要介護軽度、要介護重度と分けて比較すると (表 16)、訪問サービスでは「要支援 1 と 2」では利用率が低く、通所サービスでは「要介護 1 と 2」で

利用率が高く、その他では、「要介護 3～5」で利用率が高くなっていった (前回調査では、訪問サービスでは各項目で大きな差はなかったが、通所サービス、その他サービスは重度になるほど利用率が高くなっていった)。

(4) 世帯類別介護サービス利用状況

独居と若年者と同居では、各サービスに差はなく、高齢者世帯では、通所サービス利用が高かった (表 17)。前回調査においては、若年者と同居では、通所サービスとその他サービスが高く、独居は訪問サービスの利用率が高かった。高齢者世帯では、通所サービスの利用率が比較的高かった。

(5) 年齢別

前期高齢者と後期高齢者と比較すると (表 16)、前期高齢者の要介護認定率は 856 名中 144 名で 16.8% (前回 16.3%)、後期高齢者は 834 名中 372 名で 45.1% (前回 44.5%) と高率だった。いずれの介護サービス

についても、「その他」の項目で利用率が高かった。

(6) 透析歴別

訪問サービスでは、透析歴20年以上で利用率が高く、通所サービスでは、透析歴20年以上で利用率が低かった(表16)。ともに階層別に目立った差はなかったが、その他サービスの利用率は15~20年未満の群で利用率が高かった。

2-6 地域比較

調査参加機関の所在する地域を図2のように分けし、比較した(表17)。

要介護度別患者数を見ると、薩摩の要支援2が25.7%と他と比較して高かった。

通院方法においては、始良、伊佐他で機関による送迎が50.3%と半数を占めていた。

2-7 施設入居者の状況

施設入居中の人が117名あり、内訳は、特養・老健が25名、21.4%(前回28.8%)、その他施設が92名、78.6%(前回71.2%)であった(表18-1,18-2)。腹膜透析実施中の人が4名含まれている。要介護認定率が92.3%(前回80.3%)で、要介護認定をうけていない人が9名であり、介護サービスが必要ない人で、何らかの施設に入居している人もあった。通院方法は、施設送迎を76名、65.0%(前回71.2%)が利用していた。

2-8 高齢透析患者(独居世帯)の状況

対象高齢透析患者中、独居が309名で全体の18.3%(前回15.1%)であり、男性が172名、55.7%(前回51.5%)で、女性が137名、44.3%(前回48.5%)であった(表19-1,19-2,19-3)。要介護認定率は30.4



図2 調査参加機関所在地の区分

表17 地域比較

	介護サービス		要介護度別患者数							通院方法				
	認定者数	利用者数	要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	独力	隣接	家族	機関による送迎	介護タクシー
鹿児島市	186 (33.4) ^{†1}	115 (61.8) ^{†2}	18 (9.7) ^{†2}	25 (13.4)	38 (20.4)	40 (21.5)	32 (17.2)	22 (11.8)	11 (5.9)	187 (33.6) ^{†1}	4 (0.7)	72 (12.9)	204 (36.6)	17 (3.1)
薩摩	175 (28.8) ^{†1}	114 (65.1)	11 (6.3)	45 (25.7)	22 (12.6)	37 (21.1)	29 (16.6)	18 (10.3)	13 (7.4)	209 (34.4) ^{†1}	18 (3.0)	71 (11.7)	244 (40.1)	5 (0.8)
始良・伊佐・大隅・大島・都城市(宮崎県)	159 (30.3) ^{†1}	101 (63.5)	6 (3.8)	31 (19.5)	34 (21.4)	27 (17.0)	21 (13.2)	20 (12.6)	20 (12.6)	155 (29.5) ^{†1}	3 (0.6)	44 (8.4)	264 (50.3)	2 (0.4)

†1 対象者数(全体)に対する比率(%)
 †2 介護サービス認定者数に対する比率(%)

表 18-1 介護施設入居者の状況

入居者 総数	うち 腹膜 透析	男性	女性	平均 年齢	平均 透析歴	介護保険		要介護度別					居住・ 生活環境			
						認定 数	認定 率	要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5	特養 老健	その他 施設
117	4	60	57	81.3	5年 11ヵ月	108	92.3%	3	10	14	17	23	25	16	25 (21.4)	92 (78.6)

() 内は入居者総数に対する比率

表 18-2 通院方法

	独力通院	隣接施設から介助	家族送迎	施設送迎	介護タクシー
人数	1	25	5	76	10
比率 (%)	0.9	21.4	4.3	65.0	8.5

比率 (%) は表 18-1 の入居者総数に対する比率

表 19-1 高齢透析患者 (独居世帯) の状況

独居者 総数	うち 腹膜 透析	男性	女性	平均 年齢	平均 透析歴	介護保険		要介護度別						
						認定数	認定率	要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
309	7	172	137	74.9	7年 11ヵ月	94	30.4%	12	35	23	17	3	3	1

表 19-2 年齢構成

	65~70 未満	70~75 未満	75~80 未満	80 歳以上	合 計
人数	95	82	47	85	309
比率 (%)	30.7	26.5	15.2	27.5	100

表 19-3 通院方法および通院先

	主な通院方法					通院先施設形態	
	独力通院	隣接施設を介助	家族送迎	施設送迎	介護タクシー	病院	診療所
人数	125	0	12	166	6	124	185
比率 (%)	40.5	0.0	3.9	53.7	1.9	40.1	59.9

表 20-1 高齢透析患者 (高齢者世帯) の状況

総数	うち 腹膜 透析	男性	女性	平均 年齢	平均 透析歴	介護保険		要介護度別						
						認定数	認定率	要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
673	20	479	194	74.5	8年 2ヵ月	133	19.8%	15	25	30	32	14	9	8

表 20-2 年齢構成

	65~70 未満	70~75 未満	75~80 未満	80 歳以上	合 計
人数	174	189	157	153	673
比率 (%)	25.9	28.1	23.3	22.7	100

表 20-3 通院方法および通院先

	主な通院方法					通院先施設形態	
	独力通院	隣接施設を介助	家族送迎	施設送迎	介護タクシー	病院	診療所
人数	294	0	99	274	6	226	447
比率 (%)	43.7	0.0	14.7	40.7	0.9	33.6	66.4

% (前回 31.6%) で、要介護度別では要介護 4 に 3 名、要介護 5 に 1 名いるところに注目したい。

年齢別では前期高齢者が 177 名、57.3% (前回 53.5%)、後期高齢者が 132 名、42.7% (前回 46.4%) であった。通院方法は、施設送迎が多く 53.7% (前回 52.6%) であった。

2-9 高齢透析患者 (高齢者世帯) の状況

対象高齢者世帯の 673 名中男性が 479 名、71.2% (前回 69.7%)、194 名が女性、28.8% (前回 30.3%) であった (表 20-1, 20-2, 20-3)。要介護認定率は 19.8% (前回 20.7%)。要介護認定者 133 名のうち 102 名 76.7% (前回 76.7%) が要介護 2 以下の軽度者であった。673 名の年齢階層別には大きな人数の差はなく (前回も同様の傾向)、通院方法では独力通院が 294 名、43.7% (前回 41.8%)、施設送迎が 274 名、40.7% (前回 39.4%) で目立っていた。

2-10 高齢腹膜透析患者の状況

49 名のうち、血液透析と併用して加療している人が 6 名、12.2% (前回 25%)、要介護認定率は 49 名中 11 名で 22.4% (前回 37.5%) であった (表 21-1, 21-2, 21-3)。通院は、独力通院 20 名、40.8% (前回 37.5%)、家族送迎 12 名、24.5% (前回 29.2%) であった。年齢階層別では、後期高齢者が 28 名、57.1% (前回 66.7%) と多かった。

3 考察

今回の調査では、65 歳以上の高齢透析患者 1,690 名 (前回 1,296 名) が対象であり、平均年齢は 75.7 歳 (前回 75.5 歳) だった。2014 年 2 月に行われた福岡県での調査結果と当調査を比較すると、対象者の男女比、要介護認定率、各介護度の割合ともに相似した結果となっていた。

透析導入原因疾患は日本透析医学会より出されている「わが国の慢性透析療法の現況」にある結果と相似し、「糖尿病性腎症」による透析導入がもっとも高率で、33.8% (前回 39.5%) だった。

要介護認定率は、鹿児島県全体の一般人口における 19.8% (前回 20.2%) に対して 30.8% (前回 30.6%) と高く、前期高齢者と後期高齢者に分けて比較しても高率であった。

要介護認定率は前回同様、年齢が高くなるほど高率となり、透析導入原因疾患によって差が見られ、「糖尿病性腎症」は要介護認定率 37.1% (前回 43.8%) と他疾患より高かった。また、日常生活に支障のある合併症で、「視力障害」「四肢麻痺」「歩行障害」「下肢切断」「認知症」がある患者についても調べると、5 項目いずれでも要介護認定率は比較的高く、「下肢切断」の 44.0% がもっとも低かった。

世帯類別では、入院と施設入居者を別にして、「独居」「65 歳未満と同居」「高齢者のみ」の順で認定率

表 21-1 高齢腹膜透析患者の状況

総数	うち入院中	男性	女性	平均年齢	平均透析歴	介護保険		要介護度別						
						認定数	認定率	要支援 1	要支援 2	要介護 1	要介護 2	要介護 3	要介護 4	要介護 5
49	4	32	17	78.5	2年 8ヵ月	11	22.4%	2	0	1	1	4	2	1

表 21-2 腹膜透析患者の年齢構成

	65~70 未満	70~75 未満	75~80 未満	80 歳以上	合計
人数	7	14	6	22	49
比率 (%)	14.3	28.6	12.2	44.9	100

表 21-3 腹膜透析患者の通院方法および通院先

	主な通院方法 [†]					通院先施設形態	
	独力通院	隣接施設を介助	家族送迎	施設送迎	介護タクシー	病院	診療所
人数	20	0	12	13	0	40	9
比率 (%)	40.8	0.0	24.5	26.5	0.0	81.6	18.4

† 総数 49 人のうち、入院中の 4 人は除く。

が高かった（前回調査でも同順）。

介護サービス利用は、通所サービスが22.3%（前回30.5%）、訪問サービスが20.0%（前回23.4%）であった。訪問サービスの利用率は世帯類別で大きな差はなかった。

全体の18.2%（前回15.1%）である独居世帯は、要介護認定率が高齢者のみの世帯、65歳未満と同居の世帯と比して高く、介護サービス利用率も、高齢者のみの世帯、65歳未満と同居の世帯より高かった。独力通院も加齢とともに施設送迎へと移行している傾向にあり、これは前回調査でも同様であった。

これらのことから、通院介助、生活支援の必要性が高い様子は前回と変わらないことが窺えた。性別によっては透析導入原因疾患の割合や、要介護認定率、独力通院、透析歴の項目などで明らかな差があり、男女の特徴的な違いが見られた。

高齢患者の増加、家族構成の変化、必要な支援の内容など、「地域包括ケアシステム」が透析をしていない高齢者のみならず、高齢透析患者にも必要であることが推察された。

透析を受けている要介護者の在宅復帰が困難となった場合に入所施設への経路形成を行うケースがあるが、透析患者の入所は主として有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅に限定されることが多い。前回調査時に、施設入所している人が全体の5.1%に対して、今回は7.0%と若干増加していることから、透析患者の住む場所は広がっていると考えられる。今後も地域包括ケアシステムの発展が進み、高齢透析患者の受け入れが改善されることを願いたい。

2016年の調査から、3年経過後の調査を行ったが、両調査の大きな違いは見られなかった。

おわりに

私達は、2016年3月31日に引き続いて、2019年3

月31日現在における鹿児島県透析医会会員の所属する医療施設での介護関連調査を行った。透析をしていない高齢者と、今回調査対象とした高齢透析患者は、いずれにしても地域でどのように生活していくかが課題であることは継続している。

透析をしている高齢者の生活維持には、私達のように透析医療に携わる人達で協力し合い、他領域の医療介護従事者とも連携して、今回の対象者で58.1%、982名（前回53.4%、694名）を占める独居や高齢者のみの世帯の人々の療養環境の維持など、継続して様々な課題に取り組んでいくべきと考える。

謝 辞

本調査を進めるにあたり、ご協力いただきました鹿児島県透析医会の役員をはじめ、本県透析医会会員の所属機関の方々、ならびに各医療施設の職員の方々に深く感謝を申し上げます。

今回の報告に関連して、開示すべき利益相反状態はありません。

文 献

- 1) 日本透析医学会統計調査委員会：図説 わが国の慢性透析療法の現況（2017年12月31日現在）。東京：日本透析医学会，2018。
- 2) 村石昭彦，隈 博政，菰田哲夫，他：福岡県における高齢透析患者の介護関連実態調査報告—2014年2月現在—。日透医誌 2015；30：108-121。
- 3) 上山達典，萩原隆二，四枝皓二：鹿児島県の高齢透析患者介護関連実態調査報告—2016年3月現在—。日透医誌 2016；31：569-583。

参考 URL

- ‡1) 厚生労働省「介護保険事業状況報告 月報，2019,3,31」
<https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/m19/1903.html> (2019/6/10)